

2013年（会報第21号）

山行記録

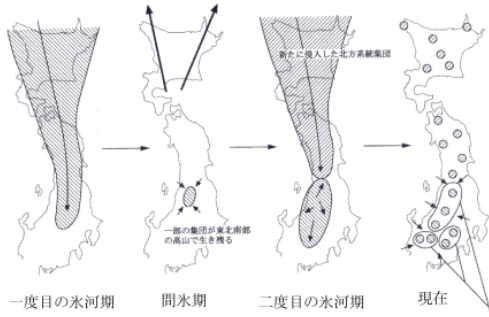


新津ハイキングクラブ

表紙のことは

表紙は秋田駒ヶ岳の火口原（ムーミン谷）の砂礫地で**チングルマ**とのスナップ写真です。また近くでは、大焼砂の砂礫地で**タカネスミレ**と**コマクサ**の群落。男岳では**シラネアオイ**も咲き誇っていた。これら日本の高山植物について文献を調べた。

現在、日本の高山植物は 500 種ほどあり、多くは、過去に存在した氷河の影響を受けています。日本の高山植物は、①図のように、ユーラシア大陸や千島列島と陸続きだった時代に、北方から移動してきた極地植物を源としています。その南限は、南アルプスです。これらの極地性植物が存続・進化した現在の植物群のことを「**周北極植物**」。



① の例

ヨツバシオガマの日本への進入過程の推定図

②一方、同じく氷河期に朝鮮半島やサハリンと陸続きだった頃、ヒマラヤなどのアジア大陸を經由し、南方から移動してきた植物も、日本の高山帯に適応進化したものが数多くあり、これを「**アジア植物**」と言う。③大雪山から南アルプス一帯にかけては、まさに南北双方が合流する場所で、多様な高山植物が定着する地理的環境だったのです。



最後の氷河期の後、暖かくなると（1万5000年前）、それらの植物は日本の高山帯に取り残されました。

チングルマは**ハクサンイチゲ**、**シナノキンバイ**、**フウ**

ロソウと似た分布を示していて、高山草原から雪田や高層湿原といった湿性の環境に生育する種に見られる。**ハクサンイチゲ**は北極海周辺より南の千島列島、カムチャッカ半島、アラスカに起源を持つ。日本では中部地方の高山帯から東北、北海道の高山帯に連続的に分布しているが、北極海周辺には広く分布せず、それより南になる千島列島からカムチャッカ半島、そしてアラスカ付近に分布の中心がある。これは**ハクサンイチゲ**が環太平洋地帯を中心とした、どちらかといえば海洋性の分布を示しており、またカムチャッカ半島やアラスカでは山地に分布していることから、もともと山地を起源とした植物が高山帯に進出し、現在の日本の高山帯で見られる高山植物となったものと考えられている。



日本列島には北極海周辺、アジア各地、千島列島やカムチャッカ半島、アラスカに起源を持つ植物や、低山帯から進出したと考えられる高山植物が分布している。表は日本の高山植物の分布域（6域ある2域を表示）です。



分布域	種数	概要	主な種
周北極植物	130	北極海周辺を中心とした北半球北部に分布を持つ種	イワベンケイ、ウサギシダ、ウメバチソウ、キバナノコマノツメ、クモマキンポウゲ、クロマメノキ、コケモモ、ゴゼンタチバナ、チシマアマナ、ツマトリソウ、ミツガシワ、ミネズオウ、ムカゴトラノオ、モウセンゴケ、リンネソウ、ワタスゲ
アジア植物	180	アジア大陸に分布を持つ種	チングルマ 、 タカネスミレ 、 コマクサ 、イソツツジ、イブキジャコウソウ、イワウメ、イワギキョウ、イワブクロ、キバナシャクナゲ、キンロバイ、クルマユリ、コガネギク、シコタンハコベ、チシマザサ、ミヤマオダマキ



最後に、**シラネアオイ**は純日本固有植物です。高山植物は氷河時代からの遺存植物といわれ、特定の環境をなす寒冷地にしか生息しない希少植物で、厳しい立地条件に耐えて生活し、人間のインパクトに弱い生きものです。そして地球温暖化によると考えられる気象の変化によって、日本の高山植物は危機に見舞われている。 (1322)N/S

(主な参考文献)・「高山植物の自然史」北海道大学図書刊行会 ・「日本の高山植物相」Wikipedia

発行日 2013年(平成25年)2月2日

編集者 広報 (1322)N/S、(1448)Y/O

発行団体名 新津ハイキングクラブ

<http://niitsuhc.web.fc2.com/>